

浪江の

こころ通信

・第26号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先が見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏（7県）の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ

再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から2年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第26号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4218

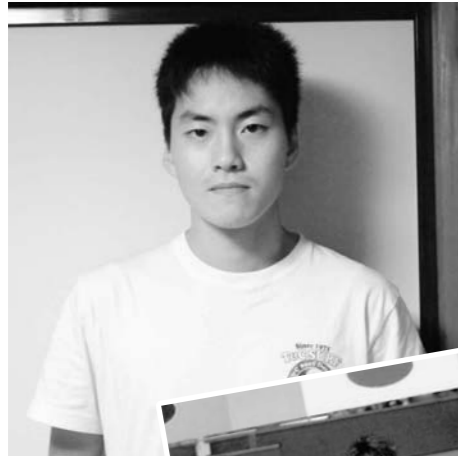




前田 賢人さん(川添)

取材者：くびき野NPOサポートセンター 榎本
取材日：7月6日

今の夢は、地元浪江で働くこと



現在は、新潟県柏崎市の社宅で母と2人暮らしの前田賢人さん。

慣れない土地で悩むこともあると思いますが、市内の高校に通いハンドボールの練習に励む毎日をごっています。将来の希望や、浪江への思いを語っていただきました。

部活の仲間達と
(左から2人目が前田さん)



■不安な日々
地震で、部屋の窓は全て無くなり、ブロック塀は根元から倒れ、瓦も道路や庭に散乱。それでも家族の無事を確認できた時の安心感は、今でも覚えています。
川俣南小学校の避難所へ行く時、人の多さにまともに休める状態ではありませんでした。食

■今後について
慣れない土地での高校生活は、馴染むまで大変でした。友達もいなく寂しい時もありましたが、ハンドボール部に入部し、今では学校生活も楽しく過ごしています。ハンドボール部では、自らゴールキーパーに立候補し頑張っています。7月29日から佐賀県で開催されるインターハイにも出場。今はインターハイに

料も無く、その時を過ごすことが精一杯で、原発事故のことすら忘れるくらい必死でした。
猪苗代へ行くと、「浪江町から」と言うだけで受け入れてもらえません。なんで？という思いでいっぱいになりました。その後、他の避難所へ行きましたが、兄の知り合いがいる新潟県柏崎市へ行くことにしました。
新潟県に入ると、1メートルはある雪の壁に驚き、不安になりました。
今でも、雪のある生活には慣れません。「長靴必須」にはとても驚かされました。新潟の冬は、浪江とは違い晴れ間が少ないです。

大好きです。
それでも生まれ育った浪江が大好きです。

向けて、部活の仲間たちと練習に熱を入れる毎日です。部活をきっかけに、とても充実感のある高校生活を過ごしています。
昨年の浪江の会に参加しました。友達に会えるかも！と期待を膨らませて行きましたが、誰も来ていなくてとても寂しかったです。浪江の友達と連絡が取れない状態です。この「浪江のこころ通信」を見て、自分が元気であることが分かれれば嬉しい。昔のように地元で遊ぶことは出来なくても、また連絡を取り、みんなに会ってこれからの話をたくさんしたいと思っています。
今、一番の願いは、高校卒業後は地元・浪江で働きたい！ということです。ですが、今の浪江は生活が出来る状態ではなく、いざ戻れた時にも仕事があるのだろうか、という不安でいっぱいなんです。



浦 喜一さん(加倉)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：7月5日

今は、とても落ち着いています



▲奥様の利子さんの作品を背景に

震災前のご夫婦でタイル工事を営んでいらっしゃいましたが、避難のため津島から郡山、埼玉、二本松、福島市と転々と移られ、ようやく2年前に福島市南矢野目の仮設住宅での暮らしを始められました。震災前や避難中は体調に大きな不安もありましたが、現在はお元気に自治会長として多くの支援活動団体を受け入れたり、役場などとの仕事に精力的に取り組んでいらっしゃいます。

■余震に奮えながらも、孫娘たちの安全が最優先でした
一昨年の大地震が起きた時は、近所に住む娘夫婦の家が新築中で、その夜から新しい家に泊まりながら家を整えようという矢先でした。私たち夫婦が住む家は、余震が頻繁で恐ろしく、庭に車を止め、毛布を持ち込んで私たちが娘、孫3人とで一晩過ごしました。
翌朝、避難指示に従って津島へ向かう途中、孫の一人がひどい車酔いになりましたが、物凄く渋滞のため引き返すことも出来ませんでした。3日間、津島

このような不安定な避難の中、幼かった孫娘たちは本当に大変だったと思います。昨年4月、高校2年生になった長女は、いわき明星高校の双葉地区サテラ

中学校の2階の廊下に寝泊まりしましたが、本当に寒かったです。その時に初めて請戸の津波や原発事故を知りましたが、放射線の怖さはさほど考えませんでした。
15日には二本松でスクリーニング検査を受け、郡山に向かいました。ガソリンが無くなりかけていましたが、娘の勤務する会社が用意してくれたホテルバーデンに辿り着き、大変お世話になりました。特に、心臓の薬が僅かで不安な中、親身になってくださった看護師さんとの出会いに助けられました。
12日間滞在した郡山から埼玉に向かい、私の妹宅に私たち夫婦、弟宅に娘と孫たちが約2週間身を寄せましたが、浪江のサテライト校が福島北高校に出来ることを知り、家族で二本松市東和に戻った途端、4月11日の大きな余震に遭い、3月よりも怖い思いをしたことを思い出します。孫たちは福島市飯坂町に借上げ住宅が見つかり、私たちは二次避難で空きが出たあづま体育館に移り、7月にやっと南矢野目の住宅に入居しました。

私は2012年から2代目の自治会長になり、役場などのさまざまなやり取りや団地内のいろいろな困り事がありました。が、これまでのルールを引き継ぎながら解決してきました。そんな中で一番苦労する仕事は、大勢の支援活動団体の方が来られてさまざまな活動をしてくださる際に住民へ声をかけ、1人でも多くの参加者を募ることに。今後立場が変わっても、自治会のお手伝いを続けていきたいと思っています。

■自治会役員としての最大の悩みは「人集め」
最近では、福島に落ち着いてしまったような思いになることもありますが、2年前、ここに越して来た時には知っていた人は1割もいませんでした。約190世帯のうち、70歳以上の方が大半で、一人暮らしは約3割弱です。
イト校に通うため、親元を離れて寮生活を始めました。次女は東和針道の浪江中学校を卒業した後、この春から本宮の県立高サテライト校に進学しています。三女は福島市飯坂小に5年生から通い、時折ストレスで体調を崩したりしましたが、今は元気に大島中に通っています。



長竹 麻弘くん(川添)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井
取材日：7月12日

失ったものよりも得たものの方が多いと信じたい —幼いころからの夢に向かって これからも頑張っていく—

『浪江のこころ通信』第1号に掲載された長竹麻弘くんは、現在、群馬県伊勢崎市立東中学校2年生。浪江にいた頃から続けている剣道、そして書道に今も頑張っている。2年前の取材の時とは見違えるほど立派な青年になった麻弘くんは、お母さんを支えながら、自分の夢に向かって前向きに進んでいきたいという。



▲大好きなスーパーこまち号のポスターと麻弘君

今は中学校の剣道部に所属して、毎日、朝早くから夕方遅くまで、そして土日も練習に頑張っています。群馬の夏は暑いので大変ですが、レギュラーを目標としています。同じく浪江の頃から続けている習字も7段になり、群馬県のペン書道展では2年連続優秀賞を取りました。そして高校受験も近づいてきています。僕は、鉄道関係を専門とする運輸科のある東京の高校に進学したいと思っています。これは浪江の保育園の頃から夢だったし、

今も変わっていません。去年の2月にあった猪苗代での浪江小の卒業式以来、もう浪江の友達には会っていませんでしたが、今年の6月、浪江小の時のランドセルが送られてきました。その中には請戸川のゴミ拾いをした時の作文がそのまま入っていました。あの頃をとて懐かしく思い出すことができず。群馬では、福島のことをニュースなどで伝えることが少ないし、ふだんの家族の会話の中からも

少しずつ福島の話が減ってしまっているのですが、たまに福島や浪江のことがテレビに映ると、やっぱり浪江に帰りたいという思いが心のなかで高まってきます。でも、犬の散歩でお母さんが近所の人と立ち話をしていたり、僕も全国一斉テストで自分の学校名を県名から記入したりすると、自分が群馬に暮らしていること、そしてこの生活に慣れてきていることをあらためて感じます。大震災によって、浪江町を離れることになったり、友達にも会えなくなったり、失ったものがたくさんありました。だけど一生懸命頑張っている今の自分があるのは、震災からのいろいろな経験があったからこそだと思っています。お母さんも今年から介護の仕事に毎日頑張っています。どんなに疲れていても、毎日忙しくしているお母さんを見てみると安心します。これからもそんなお母さんと支えあって、頑張り合って、自分の目標に向かって進んでいきます。



近藤 都さん(川添)

取材者：3・11支援チーム リゅうのしっぽ 三井・加藤
取材日：7月10日

京都そして茨城県での新しいスタートへ

浪江町で念願の手作り雑貨や大好きなカントリー雑貨の自宅ショップを開いていた近藤さんご家族。

息子さん2人と愛犬・アップルちゃんと都さんご家族は大震災後、住み慣れた浪江町から京都へ避難されました。そして先月、茨城県牛久市に転居されました。



浪江中学校のそばにある自宅の一角で、4年前から「Vanilla Box」という手作りカントリー雑貨のお店をしていました。3月11日、突然の大震災。何度も起きる余震で家の中は足の踏み場もないくらいにメチャクチャになり、手がつけられないほどでした。そうしているうちにバトカーからの「避難してください」という誘導があり、2人の息子達と愛犬・アップルとともに車に乗り込み避難しました。猪苗代湖、栃木県那須、群馬県、静岡県と転々としました。

京都の姉の家へと車で1週間ほどかけて避難しました。狭い車の中で息子達とアップルと一緒に寄り添って寝ていました。車の中は窮屈で大変でした。姉の家に1週間ほどお世話になり、団地に入居しましたがペットが飼えないところなので姪にしばらくアップルを預けていました。ある日突然行方不明になり、後日、警察署に保護され、無事、家族の元へ帰ってきました。その後、京都でペットOKの物件が見つかり一緒に暮らす事が出来ました。最初の頃は何もする気が起きず、ボーッとしている日が続きました。これでは自分がダメになる気がして少しずつ「また何かを作りたい。」と思い、コッソリ小物を作り溜め、ちようちよ京都市左京区の百万遍知恩寺境内で「手づくり市」を知り、数回、出店する事が出来ました。京都は有名な観光地でもあるので、福島のお友達が避難先より遊びに来てくれてお互い他愛もないおしゃべりをするのが何

よりも嬉しく元気が出ました。茨城県牛久市に6月下旬に引っ越しをしました。兄達も近くになったから遊びに来てくれると言っています。茨城県に引っ越しして来てから声を掛けてくれたり、ご近所の方がお野菜を持って来て下さったりと嬉しい事がありました。福島県から避難されている方の交流の場には参加していきたくと思っています。いつになるかは分かりませんがもう一度お店を始めたいと思っています。どこに住んでいても浪江は私の「ふるさと」です。いつも心の中でそう思っています。